

これならわかるぜ！

ためぐち漢文

——漢文の構造をわかりやすく知りたい君へ——

漢文の基本構造編

【第4回】副詞編

君たちは、第2回で前置詞、第3回で助動詞を学習したけど、どっちも述語を修飾したり意味を添えたりして、表現を豊かにする要素だったね。

今日学習する副詞も似たような働きをする。

ここが構造理解の山場だよ、がんばって乗り越えようぜ。

1. 副詞

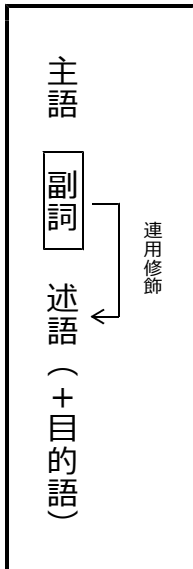
副詞は、述語の前に置かれて、述語を連用修飾し、いろんな意味を添える。

まずその理解からはじめてくれ。

いろんな意味って何かって？ 気の早い奴だな。

たとえばな、程度や範囲、時間や数量、謙譲、推定、否定、反語、状態などなど、いろんな意味を添えるんだ。

まあ、図にすると、こんなふうになる。



ひとつつ例を挙げようか。たとえば、「我読書」という文の場合、いろいろな副詞で修飾させてみると、次のようになる。

我頗読書。私はとても本を読む。(程度)

我常読書。私は常に本を読む。(恒常)

我嘗読書。私は以前本を読んだことがある。(過去)

我将読書。私は本を読もうと思う。(将来)

我 復^ま読^ム書^ヲ。 私はまた本を読む。(数量)

我 不^ず読^マ書^ヲ。 私は本を読まない。(否定)

我 豈^あ読^マ書^ヲ。 私はどうして本を読むだろうか。(反語)

ほら、副詞が全部同じ位置に置かれてるだろ？

そりゃそうさ、だって副詞は述語の前に置かれて連用修飾するんだから。

さあ、思い出してくれよ。

述語を修飾する成分には述語の前に置かれる連用修飾語と、述語や述語構造(述語＋目的語)の後に置かれる補語(後置修飾語) ってのがあったろ？

副詞はその連用修飾語の代表格なんだ。

さらに逆に言えば、前置詞句が述語の前に置かれりや連用修飾句になるって前に説明したわけだが、その場合は要するに副詞と同様の働きになるってことだな。

◎ポイント！…副詞は述語の前に置かれる連用修飾語。

前置詞句も同じ位置に置かれて、副詞と同様に述語を修飾することがある。

2. 程度副詞

副詞の中でも、いちばんわかりやすいのがこいつかな？

日本語でも、「とても」とか「ちつとも」とかあるじゃないか。

それと同じように、述語を修飾してその**程度を表すのが程度副詞**さ。

これには色々あるんだが、代表的なものをいくつか紹介しよう。

韓 甚^シ疏^ス秦^ヲ。

▼韓^{かん}甚^しだ秦^{しん}を疏^うず。

▽韓の国はとても秦の国をうとましく思っていた。

「甚」^{はなはた}は程度が甚だしいことを表す副詞だ。

他にも色々あるぜ。

「極」^{きはて}（きわめて・非常に）、「太」^{はなはた}（はなはだ・非常に）、「頗」^{すこぶ}（とても・非常に）、「殊」^{こと}（特に・非常に）
に）なんかがよく使われるかな。

翁但微頷之。

▼翁^{おきな}但^{ただ}微^{わづ}かに之^{これ}に頷^{うなづ}くのみ。

▽老人はただこれに少しうなづくだけだった。

「微」^{わづかに}は量や程度が少ないことを表すんだ。

他に、「少」^{すこし}（すこし・わずかに）、「稍」^{やや}（すこし・わずかに）などがあるぜ。

え？ 老人がなぜ少しうなづくだけだったのか知りたいって？

うん、よし！

この老人、実は油売りなんだが、たまたま陳康肅公^{ちんこうしゆくこう}つて弓矢の達人が家の畑で射の練習してるのを見て
たんだよ。

見事、10本中、8、9本当てるを見たのに、少しうなづくだけだったわけ。

康肅が「わしの射は実に正確だろ？」って声をかけたら、この油売り、「ま、手慣れてるだけです」なんてほざく。

康肅がムツとしたところへ、この油売り、自分の荷物の中からヒョウタン1個取り出して、その口に穴の
開いた銅銭のつけて、ひしゃくにくんだ油をタラタラ流し込むんだ。

ほんの一滴も銅銭が油で濡れないんだぜ、すごいだろ？

老人、そこで一言、「ほら、私も手慣れてるだけですわい。」ってさ。

これ、欧陽脩^{おうえいしゆう}という宋の文章家が書いてるお話だよ。

さて、話を本題に戻そう。

次の副詞はと…

靈公既立、趙盾益專^{ラニス}國政^コ。

▼靈公^{れいこう}既^{すで}に立^たち、趙盾^{てうとん}益^{ますます}專^{もっぱ}らに國政^{こくせい}を專^{もっぱ}らにす。

▽靈公が即位してから、趙盾はますます國政を独占した。

「益」は程度の強まりを表す副詞だ。
他に、「愈」（いよいよ・いっそう）、「弥」（いよいよ・いっそう）、「更」（いよいよ・いっそう）などがあるな。

「益」「愈」「弥」は読み方もよく聞かれるぞ、覚えとけ。

ところで、今挙げた副詞の中には、訓読では「ますます」とか「いよいよ」とか、同じ訓を2回繰り返して読む字があるだろ？

そこで1つ教養を授けよう。

こういう場合、「益」「愈」というふうに「々」を施すことがあるんだ。

これを「二の字点」と言って、訓を2回繰り返すことを表すんだよ。

「二」を崩して書いた記号だよ。

時々漢文に施されてることがあるから、知っといたほうがいい。

「々」とは違うんだぜ、それは漢字を2回繰り返す記号だ。

ちゃんと区別しろよ。

さて、ここで紹介した程度副詞、全部同じ位置に置かれてるだろ？

どこだった？ そう、述語の前さ。

他の副詞も全部おなじなんで、これからはもう二度と言わないぞ。

ちゃんと頭のノートに書いとけよ。

◎ポイント！…程度副詞は述語の前に置かれ、連用修飾して、その程度や程度の深まりを表す。

・甚^ダ A^{。ス}

▼^{はなは}甚だ A ず。

▽とても A する。非常に A する。

・微^{カニ} A^{。ス}

▼^{わづ}微かに A ず。

▽わずかに A する。少し A する。
など。

・益^ス A^{。ス}

▼^{ます}益 A ず。

▽ますます A する。

・愈^ス A^{。ス}

▼^{いよいよ}愈 A ず。

▽いよいよ A する。いっそう A する。

3. 範囲副詞

述語が述べることの範囲を表すのが範囲副詞だ。
これにも、実は色々ある。

国人皆_レ怨_レ公_ヲ。

▼_{こくじんみなこう} 国人皆公を怨む。

▽国民はみな公を怨んだ。

「皆」はすべての範囲を表す副詞だ。

「咸_{みな}」(みな・すべて)とか、「尽_{ことごとく}」(みな・すべて・ことごとく)、「悉_{ことごとく}」(みな・すべて)、「俱_{とも}」(みな・すべて)などがある。

特に「尽_{ことごとく}」はよく読み方も問われるから要注意。動詞の場合は「つく」と読むんだが、副詞は「ことごとく」だ。

絶対覚えとけ！忘れんな！

矢人惟_ハ恐_レ不_レ傷_レ人_ヲ、函人惟_ハ恐_レ傷_レ人_ヲ。

▼_{しじん} 矢人は惟_た人を傷_{きず}つけざるを恐_{おそ}れ、_{かんじん} 函人は惟_た人を傷_{きず}つくるを恐_{おそ}る。

▽矢を作る人はただ(自分の作る矢が鈍くて)人を傷つけないことを心配し、鎧を作る人は(自分の作る鎧がもろくて)人を傷つけることを心配する。

「惟_た」は範囲の限定を表す副詞だ。

市販の参考書なんかでいわゆる限定の形というところで述べられてるやつで、範囲副詞の中では特に大事なやつさ。

これは数が多くて、「惟_た・唯_た・但_た・只_た・徒_た・特_た・直_た・止_た・第_た」(ただ)、「独_{ひとり}」(ただ)なんかがある。

この限定の範囲副詞は、述語の直前に置かれるだけでなく、次の例のように、主述文の先頭に置かれて、述語で述べられることが、主語だけに限られることを表すこともあるんで注意が必要だよ。

仁_{にん}之_の難_{がた}成_な久_{ひさ}矣_や、惟_た君子_{くんし}能_{これ}之_を。

▼_{にん} 仁の成_なし難_{がた}きや久_{ひさ}し、惟_ただ君子_{くんし}のみ之_{これ}を能_よくす。

▽仁道がながたいのは昔からだ、ただ君子だけができることである。

「仁」ってのは、儒学の最高の徳目で、奥深すぎて、そりゃ何だと説明するのは難しい。

それだけで大学の卒業論文が書けちゃうぐらいなんだが、そこをあえてうんと簡単にいうと、愛だね。他者に対する深い思いやりを根底にする愛情なんだよ。

口にするのは簡単だが、なかなかできることじゃない。だから、孔子はめったに口にしなかったぐらいなんだ。

ところで、右の例文、仁の実行がめっちゃ難しいことをベースにおいて、それをなしとげることができるのは、君子、つまり有徳の人物だけに限られることを、範囲副詞「惟^ダ」が表してる。

主語「君子」＋述語「能」＋目的語「之」の構文だろ？

その先頭に「惟^ダ」を置いて、「能^ス之^ヲ」（仁をなしとげることができる）という述語が述べる内容が、主語「君子」だけに限定されることを表してるんだよ。

文の構造、よく見とけ！

◎ポイント！…範囲副詞は述語が述べることの範囲を表す。

特に大事なものは限定を表す「惟^タ・唯^タ」や、「独^{ヒト}」。

・唯^ダ
A。^ス

▼唯^タだAす。

▽ただAする。

・独^リ
A。^ス

▼独^{ヒト}りAす。

▽ただAする。 など。

↓いずれも「Aするのみ」と「ノミ」を送って読むこともある。

・唯^ダ
A B。^{ノミ}

▼唯^ダだAのみBす。

▽ただAだけがBする。

↓主述文の先頭に「唯^ダ」などが置かれると、述語が述べる内容が主語だけに限られることを表す。

↓「唯^ダ A B。^{スルノミ}」と、最後に「ノミ」を送って読むこともあるが、意味は同じ。

ところで、範囲副詞の中には、主語に関係しているのか、目的語に関係しているのか見分ける必要のあるものがある。

「皆」とか「独^リ」だよ。

どういうふうなっ？

じゃあ、たとえば「猿皆食^{ラウ}桃^ヲ」ってのはどどういう意味だい？

え？「すべての猿が桃を食べた」という意味だって？

うん、確かにそう解せるね。

でも、ほかにも解釈のしようがあるだろ？ どうだい？

そう、「猿が全部の桃を食べた」とも解せるね。

つまり、「猿皆食^{ラウ}桃^ヲ」（すべての猿が桃を食べた）なら、「皆」は猿に関係していることになる。

ところが、「猿皆食^{ラウ}桃^ヲ」（猿が全部の桃を食べた）なら、「皆」は「食^{ラウ}」の目的語「桃」に関係していることになる。

同じことが「独^リ」にも言えるんだ。

「我独^リ知^ル汝^ヲ」も、「私だけが君を知っている」という意味の場合と、「私は君を知っているだけだ」という意味の場合があるんだよ。

ここの判断を間違うと、文意をつかみそこなうから、前後の文脈でちゃんと見極めようぜ。

梁^リ与^ニ籍^ニ俱^ニ覩^ル。

▼梁^リ籍^ニと俱^ニに覩^ルる。

▽項梁は項籍とともに見た。

これは前に前置詞「与^ニ」のところで出した例。
覚えてるかな？

「俱^ニ」は動作行為の共同を表す副詞だよ。

他に、「共^ニ」（ともに・いっしょに）などがある。

この例のように「与^ニ」前置詞句とともに用いられることが多いのが特徴だね。

◎ポイント……範囲副詞「俱^ニ」や「共^ニ」は、動作の共同を表す。前置詞句「与^ニ」と呼応して用いられることが多い。

・ A 与^ニ B 俱^ニ C。^ス

▼ A B と俱^ニに C ず。

▽ A が B と共に C する。

兄弟相争^ヒ、叔姪互^ニ軋^ル。

▼兄弟相争^ヒ、叔姪互^ニに軋^ルる。

▽兄弟がたがいに争い、おじとめいがたがいに不和である。

「相」や「互」は動作行為が双方向に及ぶことを表す副詞だ。
他に、「交」（たがいに）などがある。

ところで、「相」は「明月来相照」（明月がのぼり私を照らしてくれる）の例のように、動作が単一方方向に向かう意味を表すこともあるので要注意。

もし「たがいに」って意味なら、明月と私が照らし合うことになる…

つまり「私」は坊主頭ってことか？

んなわけないだろ！

◎ポイント…：範囲副詞「相」や「互」「交」は、動作行為が双方向に及ぶことを表す。

・相 A_{。ス}

▼相 A_{。ス}。

▽たがいに A_{。ス}する。

4．時間副詞

漢文で時制を表すのは副詞の役割。

完了や過去、現在、そして将来、未来をこいつが表してくれるんだ。

武王既没、殷民叛之。

▼武王既に没し、殷の民之に叛く。

▽武王がすでに亡くなってから、殷の民はこれにそむいた。

「既」は動作行為の完了を表す副詞だ。

他に「已」（すでに・もう）などがある。

武王は周の武王。前に紹介した周の文王の子だよ。

暴虐な殷の紂王を武力で倒したんだ。

これを殷周革命という。

吾嘗^レ与^レ越戰^フ。

▼吾嘗^{われかつ}て越^{あつ}と戦^{たたか}ふ。

▽私は以前越の国と戦った（ことがある）。

「嘗^{かつ}」は行為や事件が過去にあったことを表す副詞。

他に「曾^{かつ}」（かつて・以前）なんかがある。

寡人曩^レ不知^ラ子、今知^ル矣。

▼寡人曩^{くわじんさき}に子^しを知らず、今^{いま}知る。

▽私は以前は君を知らなかったが、今は知っている。

「曩^{さき}」は過去を表す副詞だよ。

他には、「郷^{さき}・嚮^{さき}・向^{さき}」（以前・むかし）などがあるぜ。

蚌方出曝^ス。

▼蚌方^{ばうまへ}に出^いでて曝^{あび}す。

▽どぶ貝がちょうど（川から）出て日にあたっていた。

「方^{また}」は現在や適時を表す副詞だ。

他に、「今^{いま}」（いま）、「適^{また}」（ちょうど・おりしも）、「会^{たまたま}」（ちょうど）などがある。

この例は、いくらものを知らない君らでも知ってるだろ？

趙^{ちよう}に攻め込まれそうになった燕^{えん}の王様が、縦^{しやう}横^{わう}家の蘇^そ代^{だい}を使者に立てて、攻撃をやめさせようとした時に、蘇代が使った喩え話の中に出てくる。

ほら、「漁父^{ぎよほ}の利^き」ってやつ。

蘇代^{そだい}が易水^{えきすい}って川を通りがかったとき、ちょうどどぶ貝がひなたぼっこしてたそうな。

そこへシギって鳥が飛んできて、どぶ貝の肉をついばんだところ、あわててどぶ貝が殻を合わせる。

お互い放せないじゃないか！

意地を張り合つてるところに漁師がやってきて、どっちも捕まえちゃったってお話。

思い出したかい？

だから、おたくも燕の国なんか攻めて疲弊しちゃったら、ほかの大国に攻め取られちゃいますよって脅し

たわけ。

さて、時間副詞の中でも特に将来・未来を表すやつが要注意だ。

古典中国語としてじゃなくて、いわゆる訓読で特殊な読み方をするからなんだ。

そうさ、入門期に習ったろ？ 再読文字ってやつだ。

厲公將_レ伐_レ鄭。

▼厲公將_レに鄭_レを伐_レたんとす。

▽厲公が鄭の国を攻めようとした。

「將_二」は、将来を表す時間副詞なんだが、「まさしく(セ)ントす」と、2度に分けて読む。

でもな、わざわざ2度に分けて読んでるのは日本人だけ。

中国人はもちろん1回しか読まないぞ。

だからほんとは別に特殊でもなんでもないんだ。

晋国且_レ有_二大難_一。

▼晋国且_レに大難_二有_一らんとす。

▽晋国は(近いうちに)大難がおこるだろう。

「且_二」も「將_二」と同じく、行為や事態の近い将来の実現を表す時間副詞だ。

「將_二」にしても「且_二」にしても、2度に分けて読む習慣があるもんだから、わざわざ「ちようどくしよう」とか「今にもくしようである」とか分けて訳しなさい！なんて変なことを教える先生もあるんだが、そんな馬鹿々々しいことしないでいい。

もう1回言うぞ、2度読んでるのは日本人だけ。

「くしようとしている・くしようと思う」「くしようである・くするだろう」と1度訳せば十分さ。

「ちようど」とか「今にも」なんてつけると、かえって訳がおかしくなることもあるから気をつけろ。

それから、これは再読文字じゃないんだが、「欲_二」も近い将来を表す時間副詞。

「く(セ)ント欲ス」と読む。

「望む」という意味の日本語の動詞として訓読するから理解しにくいかもしれないが、将来を表す時は時間副詞に分類されるんだ。

この場合の「欲_二」は、助動詞のところでも述べたように、語法学者は「くしようと思う・くしたいと思

う」の意味の助動詞「欲^ス」とは区別してるんだぜ。

意志や希望を表すのは助動詞の役割、時制を表すのは副詞の役割だからさ。

でも、前にも述べたように、副詞と助動詞は同じ位置に置かれて、似たような働きをするから、あんまり品詞名にこだわらなくてもいい。

過去・現在・未来を表す副詞を紹介したけど、時間副詞には他にも色々ある。

「終^{マツ}」(最後まで・しまいには、結局)は終局を表すし、「即^{すなはち}」や「立^{たちまち}」(すぐに)は即時を表す。

また、「常^{つね}」(いつも・常に)は恒常、「俄^{いはか}・遽^{いはか}・卒^{いはか}」(急に・突然)は突然、「稍^{すうやくやうやく}・漸^{ぜん}」(しだいに)は変化を表すんだ。

他にもまだまだうじゃうじゃあるんだが、これは少しずつ覚えてもらうしかないかな。
とにかく副詞は数が多いんだ。習うより慣れるだな。

◎ポイント!...時間副詞は、完了や過去、現在、将来、未来という時制を表す。

・既^{すで} A^ス ・已^{すで} A^ス

▼既にAす。・已にAす。
▽すでにAした。(完了)

・嘗^{かつ} A^ス ・曾^{かつ} A^ス

▼嘗てAす。・曾てAす。
▽以前Aしたことがある。(過去の経験)

・曩^{さき} A^ス ・嚮^{さき} A^ス

▼曩にAす。・嚮にAす。
▽以前Aした。・昔Aした。(過去)

・方^{まぎ} A^ス

▼方にAす。
▽ちょうどAする。(適時)

・将^{まぎ} A^ス ・且^{まぎ} A^ス

▼将にAせんとす。・且にAせんとす。
▽Aしようとする。・Aしようと思う。

Aしそうである。(将来)

・欲^{ほつ} A^ス

▼Aせんと欲す。
▽Aしようとする。・Aしようと思う。

Aしそうである。(将来)

5. 数量副詞

重複や頻度などの数量を表すのがこの数量副詞だ。

其後四年、越復伐吳。

▼其の後四年、越復た吳を伐つ。

▽その後四年経って、越の国はまた吳の国を攻めた。

「復」(もう一度・また)は重複を表す副詞だよ。

気をつけなきゃいけないのは、必ずしも「二度」という意味を表さずに「さらに」ぐらいの意味の場合も多いってことなんだ。

このあたりは、それを知らない先生が「二度」にこだわって説明されることもあって、ちょっと面倒だな。

重複を表す数量副詞には他に、「又」(また・ふたたび・さらに)や「亦」(くもまた)などがある。

この「また」と読む副詞の送り仮名が、ちよいややこしいんだ。

教科書なんか見ると、「復」はほぼ百パーセント「復」と「タ」を送ってる。

「亦」なんかは、むしろ「亦」で、ほとんど「タ」は送られない。

「又」も、どっちかという「タ」が送られない方が多いかな…

同じ日本語「また」として読むのに、この不統一は何とかならんもんな…

ためぐち先生は、全部「タ」を送ってるけど、そういう不統一があることは知っててくれ。

范増数項王。

▼范増数項王に目す。

▽范増は何度も項王に目くばせした。

「数」(何度も・しばしば)は頻度の多い繰り返しを表す副詞だ。

他に、「屢」、「頻」(何度も・しばしば)などがある。

この「数」や「屢」は、よく読み方が問われるんで注意しろ。

ちなみに、前に「二」の字点「つて」を紹介したろ？ ほら、漢字の「二」を崩した「ㄣ」だよ。

「数」「屢」も「数」「屢」って「二」の字点が施されることがある。

ありがたいなあ、これで読み方がわかるわけだよ。

◎ポイント!…数量副詞は重複や頻度を表す。

・復^タA^{。ス}

▼復^またA^す。

▽もう一度Aする。・またAする。・さらにAする。

(重複)

・数^スA^{。ス}

▼数^{しばしば}A^す。

▽何度もAする。・しばしばAする。

(頻度)

6. 敬謙副詞

相手に対して敬意を表すのがこの敬謙副詞だ。

英語にも「please」つてのがあるだろ？ それに似てるかな。

請^リ奏^{そう}瑟^せ。

▼請^こふ瑟^{しつ}を奏^{そう}せよ。

▽どうか瑟（＝弦楽器の1つ）を演奏してください。

「請^こ」は、会話文や手紙文で用いられた時、相手に対して敬意を示しつつ行為を依頼して「どうか〜してください」という意味を表したり、自分が行為をすることの許可を求めて「どうか〜させてください」という意味を表すんだ。

右の例の場合は、相手に対して敬意を示しながら瑟の演奏を求めているわけ。

「請^こ」はもともとは「請い求める」という意味の動詞だけど、虚化して、自分を相手より下に置いて敬意を表す働きの副詞として働いてるんだ。

まあいわば英語の「please」みたいなもんだね。

訓読ではもとの動詞の読みと同じで、「こつ」と読む。

さて、また脱線しようか。

この例文、前に紹介した趙の名臣藺相如にまつわる話が出典なんだ。

大秦に攻められてぼろ負けした趙の恵文王、澠池^{めんち}つてとこに呼び出されちゃうんだ。

名目は講和会議なんだが、その実は、趙王を貶めて属国にしてやろうという秦の思惑がある。

怯える恵文王に随行したのが藺相如さ。

「請う瑟を奏せよ」ってのは、その澠池の会合で、秦王が狙いすまして言ったセリフ。もともと瑟って弦楽器は女性が弾く楽器なのさ。

それを弾かせて文書に記録し、秦王が趙王を臣下扱いして恥をかかせたって事実を刻んでやろうと考えたわけ。

そうだとわかってても拒むことなんてできないし、恵文王は嫌々瑟を弾くんだが、そこへささず藺相如が、「秦王はお国の音楽がお好きとか。ひとつかわらけをチヨンチヨン叩きながら歌ってもらいましょうか。」って言う。

すごいよな… もちろんそんな恥ずかしいこと、秦王は断るんだが、藺相如は「5歩のうち、どうか私の首の血を秦王さまにぶっかけてさしてくだされ！」と迫る。

この表現も原文は「相如請得以下頸血濺大王矣。」なんて、敬謙副詞「請」をつかって、言葉ぶりはめっちゃ丁寧なんだぜ。

でも、こういうのを慰撫無礼って言うんだよ。

要するに、自分も決死の覚悟でぶっ殺しますぞ！って言うてるわけなんだから。

秦王の家臣たちが無礼をとがめて斬り殺そうとしたんだが、藺相如がどやしつけると気圧されちゃうしまつ。

結局秦王はど田舎の歌を、かわらけ叩きながら歌うはめに。

もちろんしっかりこのことは文書に記録させたんだぜ、藺相如は。

というわけで、趙王は最後まで秦の下手に立たずに済んだんだ。

超弩級にすごい奴なんだ、この藺相如って男はな。

さて、話をまた本題に戻してと…。

敬謙副詞「請」は、他者に行為を依頼する意味の場合は、訓読では「請フ（セヨ）」と読むのが普通なんだが、「請フ（セ）ンコトヲ」とまるで倒置文のように読んだり、動詞のように「（セ）ンコトヲ請フ」と返って読むこともある。

臣請行之。

▼臣請ふ之を行はん。

▽わたくしはどうかこれを行わせてください。

今度は相手に敬意を示しつつ自分の行為の許可を求めている。

行為の許可を求める意味の場合は「請フ（セ）ン」と読むのが訓読の習慣。

でも、これも「請フ（セ）ンコトヲ」と訓読することもあるぜ。

臣窃以為不可。

▼臣^{しんひで}窃^{ちつ}かに以^{もつ}て不可^{ふか}なりと為^なす。

▽わたくしははばかりながらよくないと存じます。

「窃^{ひかニ}」(はばかりながら・私見ながら)は、謙遜の意味を表す副詞だよ。

敬謙副詞にはこれら以外に、「伏^{ふし}」(謹んで(ゝする)なんてがある)。

どれも訓読した時の読み方とじゃっかんニュアンスが違うんで整理しとかきやな。

◎ポイント!…敬謙副詞は相手への敬意を表す。

・請^コA^{セヨ}

▼請^コふA^セよ。

▽どうかAしてください。

請^コA^{セン}

▼請^コふA^{セン}。

▽どうかAさせてください。

・窃^{カニス}A^ス

▼窃^{ヒソ}かにA^ス。

▽はばかりながらAします。・私見ながらAします。

7. 否定副詞(否定)

動作や状態、事実を打ち消したり、禁止したりする働きをするのが否定副詞だ。

難しく考えることはないぞ、君らの生活の中でもしょっちゅう使われてるんだぜ、「不便」とか「不慮」だとか、「非常識」「未完成」とか、いっぱいあるだろう。それぞれ。

大切なのは、その場合、「不」とか「非」とかが必ず否定される語の前にあるだろ? その確認だ。

つまり副詞が述語の前に置かれて連用修飾するって大原則に、ぴったりあてはまってるんだぜ。

褒^{ホウ}姍^ジ不^レ好^マ笑^フ。

▼褒^{ホウ}姍^ジ笑^{ワラ}ふを好^コまず。

▽褒姍は笑うことを好まなかった。

「不」は、動作や状態を否定するんだ。

日本語の助動詞「ず」として訓読するから、副詞っていうのはわかりにくいかもしれないが、動詞や形容詞などの述語の前に置かれて述語を連用修飾し、否定を表すんだ。

「不」以外に「弗^ふ」（音はフツ）も用いられるぞ。

ところで、また脱線してもいいかい？

この褒姒の話はぜひしたい。

え？早く講義を続けろって？ 語法だけ学んで、何が楽しいんだい？ 漢文には山のようなおもしろい工

ピソードがあるんだぜ。それを楽しまなきゃ！

この褒姒ってのは、西周の最後の王様幽王^{ゆうおう}に寵愛された女性だよ。

その素性もいわくつきで、ほんとはそれも語りたいところなんだが、それをやり出すと、今日の講義がそれだけで終わっちゃうんで、君らに自分で調べてもらうことにして、まあとにかくめっちゃめっちゃ美人だったんだ。

ところが1つ欠点があつて、どうしても笑わない。

手を変え品を変えて笑わそうとするんだが、全然まったくこれっぽっちも笑わないんだ。

ところで、周では敵襲があつた時に備えて、のろしと太鼓を用意してたんだが、たまたま敵襲がないのにのろしをあげちゃつたことがあつたんだよ。

すわ大変！と急ぎ馳せ参じた諸侯が、あれ？敵はどこ？つてきょんとしてる様子を見た褒姒、初めて大笑いしたんだよ。

それ見た幽王、嬉しくなっちゃつて、それ以来何度も嘘ののろしをあげたんだ。

わかるよな？もうこの先。中国版おおかみ少年だよ。

ほんとに敵が攻めてきた時、だれも助けにこなくつて、幽王は殺されちゃつたつてわけ。

これが世界史で習う「周の東遷」のきっかけになったんだよ。

だから、褒姒は亡国の美女つてことで有名だよな。知つとけよ。

さて、講義に戻ろうか。

此^ハ是^レ蛇^{ニシテ}非^ニ人^ニ。

▼此^{これ}は是^これ蛇^{へび}にして、人^{ひと}に非^{あら}ず。

▽これは蛇であり、人ではない。

「非^{あら}ず」は、述語の性質によって働きが異なるんだ。

この例のように名詞や名詞句が述語の中心語の場合は、主語と述語の「…は…である」という関係を打ち

消して、「…はくではない」という否定的判断を表す。

副詞なんだが、こいつはおもしろいことに、名詞述語を修飾できるんだな。

ところで、「くにあらず」という日本語の読みが文法的に説明できるかい？ 「くならず」と同じなんだぜ。

断定の助動詞「なり」を「にあり」の二語に分けて、助動詞「ず」で打ち消したものだ。

「非」の後に伴う語を名詞または名詞句と想定して「くでない・くではない」という意味の「にあらず」と翻訳したわけだ。

非^ス誅^{スルニ}之^ヲ、事^ヲ恐^{ラハレ}敗^レ。

▼之^{これ}を誅^{ちゆ}するに非^{あら}ずんば、事^{こと}恐^{おそ}ろくは敗^{やぶ}れん。

▽彼を殺さなければ、事はおそらく失敗するだろう。

「非^ス」は、普通は名詞を修飾するんだが、実は動詞や形容詞を修飾することもあるんだ。

中国ではその場合、「不」と同じ意味で「くしない・くでない」という意味を表すとされる。

つまり、「非^ス誅^{スルニ}之^ヲ」は「不^{ンバ}誅^セ之^ヲ」と同じで、「彼を殺さなければ」という意味だというわけだ。でも、「非^ス」はやっぱ「不」とは違って、本来はやはり否定的判断を表す副詞なんだから、「不^{ンバ}誅^セ之^ヲ」が「彼を殺さなければ」という、行為主の意志のこめられた表現になるのに対して、「非^ス誅^{スルニ}之^ヲ」は「彼を殺すという選択肢でなければ」という状況の否定的判断を表していると考えるべきだろうね。

なお、「非^ス」と同じ意味や働きをもつ副詞には、ほかに「匪^{あス}」（音はヒ）がある。

ところで、この例で用いられてる「誅」って漢字、これは知っと思ってほしいな。

「罪をとがめて殺す」って意味だよ。

だから「天誅^{てんちゆう}」なんてこともあるだろう？

「ころす」という意味を表す漢字にもいろいろあるんだ。

前に「弑^シ」（しいス）ってのがあったろ？ さて、どついう意味だった？

其^{ソノ}人^リ居^リ遠^{キニ}、未^ミ来^ラ。

▼其^その人^{ひと}遠^{ひとほ}きに居^をり、未^{いま}来^きたらず。

▽その人は遠くにいて、まだ来ない。

「未^ミ」は、まだ動作や行為が行われていない、状況が実現していないことを表す否定副詞だ。

訓読では再読文字として扱い、「未ダ（セ）ず」と読むことは、もちろん知ってるよな。

他にも、所有や存在を否定する動詞「無」や、あとで述べる無指の代詞「莫」が副詞として用いられて、「不」に近い意味を表すとされることもある。

つまり、「無」信「や」莫「信」が「不」信と同じような働きをしているなら、「無」や「莫」も「不」と同じ否定副詞と考えようというわけだ。

古典中国語は働きに応じて品詞を与えられるわけで、「不」と同じ働きなら否定副詞って合理的に考えるからなんだね。

さて、ほんこのところはどうか。

食無_レ求_ル飽_ク居無_レ求_ル安_キ

▼食飽くを求むる無く、居安きを求むる無し。

▽飲食については満腹を求めず、生活については安楽を求めない。

「無」人なら、「人がいない」ってことだから、「無」はその目的語「人」が存在しないことを表す動詞で「有」の真逆だよ。

でも、右の例が否定してるのは「求」（求める）って動詞だろう？

この場合、「求めることがない」というのはつまり「求めない」に近いじゃないか。

だから「無」は「求」という動作を打ち消す副詞の働きをしてるって考えるわけさ。

でも、もうちょっと慎重に説明しておく、「無」求と「不」求が全く同じかというと、ためぐち先生はそれは違うと思う。

「有」が客観的な存在を表すように、「無」は客観的に存在しないことを表すんだ。

だから、「不」求だと、場合によっては「求めない」という話者や書き手の意志がこもることもあるけど、「無」求は客観的に見て「求めることはない」と否定する違いはある。

だから、変な言い方だが、無理に「無」を「くしない」と訳さなくても、「くすることはない」と訳したっていいんだ。

え？それなら説明すんなって？ まあそう言っただけだよ…

中国では否定副詞とみなしてるんだぞと言いたかったただけなんだ。

次に「莫」について説明するぞ。

まずは副詞じゃなく本来の働きから説明しよう。

「莫」は「なし」と呼んで、訓読からは「無」と同じように見えるけど、実はかなり違うんだな。結論からいうと、「無」は「有」の反対の動詞で「所有しない」「存在しない」ということを肯定的に

述べるんだが、「莫^ム」は無指の代詞、つまり指すものがない代詞なんだ。

たとえば有名な「四面楚歌」の場面で、項王が「拔山蓋世」の詩を詠んだ時、「左右皆泣、莫^ム能^ケ仰^ギ視^ル」（左右皆泣き、能く仰ぎ見る莫し）って、『史記』には書かれてる。

教科書なんかでは「莫^ム能^ケ仰^ギ視^ル」って読まれてるから、テストで訳せて問題になると、「側近たちはみな泣いて、仰ぎ見ることができるものはいなかった」って訳さないと不正解にされちゃったりする。つまり「だれも仰ぎ見ることはできなかった」とか「だれも仰ぎ見られなかった」なんて書くと×にしちやう先生がいるんだな、困ったことに。

でも、もう一度言うが、「莫^ム」は無指の代詞なんだから、この文の構造は主語「莫」＋述部「能仰視」で、「存在しない人が＋仰ぎ見ることができる」って意味だから、自然に訳せば「誰も仰ぎ見ることはできなかった」で何の問題もないんだよ。

要するに×にしちやう先生は、「莫^ム」が無指の代詞だとご存じなく、「なシ」と読んでいるから「無^ム」と同じで、何がなんでも「ゝがない・いない」と訳さなきゃといけないと思い込んでいるだけなんだよ。

ま、ここまでが「莫^ム」の本来の働きの説明だ。

ところが、次の例を見てくれ。

諸将皆莫^ム信^{ズル}。

▼諸将皆信ずる莫^ムし。

▽諸将はみな信じなかった。

この「莫^ム」が無指の代詞とすると、ちょっとアレ？って思うだろう？

これは「諸将はみんな信じなかった」ってことだよな？

つまり意味的に「諸将皆不^セ信^{ズル}」と考えて、現在主流の古典中国語文法ではこういう「莫」は「不」と同じ否定副詞だと説くんだよ。

日本の漢和辞典にもそれを引き写して書いてるのがある。

あるいは正しい説明なのかもしれないが、最近ためぐち先生は、ちょっと懐疑的だ。その方が説明しやすいからという合理的な解釈のような気がするんだよ。

そこでひとつ私見を述べておくことにしようかな。

「皆」が主語に関係することがあるというのは前に述べたよね、この「諸将皆」は、「みな諸将が」ってことさ。

「莫^ム信^{ズル}」は、「存在しない人が信じる」つまり「誰も信じない」ってことだろう？

だったら、「諸将はみな、誰も信じなかった」で、別にいいんじゃない？
わざわざ「莫」を「不」と同じと論じる必要があるのかね。
と、まあ、そんなふうに思うわけだ。

え？それなら迷わすような説明すんな！今度はレッドカードだよ！って？
ははは… 現在の学説がそういう方向にあるってことを示していただけだよ。
ただどな、みんな… ひとつためぐち先生の思っていること言っていないかい？

合理的な解釈するのは、時として本質を見落とすことがあるんだってことを知っておいてほしいんだ。
わからないことや、おや？って思ったことを、合理的に片付けようとせず、1つひとつ丁寧に確かめて
いくってことが大切なんだ。

それが「学ぶ」ってことだと思うんだよ。
あれ？ みんな眠そうな顔してるなあ…

◎ポイント！…否定副詞は動作や状態、事実の打消を表す。

・不_レ A_{。セ}

▼Aせず。

▽Aしない。

(動作・行為の打消 Aは動詞)

不_レ A_{。ナラ}

▼Aならず。

▽Aではない。

(状態・性質の打消 Aは形容詞であることが多い)

・非_レ A_{。ニ}

▼Aに非_あず。

▽Aではない。

(否定的判断 Aは名詞や名詞句)

非_レ A_{。スルニ}

▼Aするに非_あず。

▽Aしない・Aするわけではない。(行為の否定的判断 Aは動詞)

非_レ A_{。ナルニ}

▼Aなるに非_あず。

▽Aではない。(状態や性質の否定的判断 Aは形容詞)

・未_レ A_{。セ}

▼未_{いま}だAせず。

▽まだAしない。

(未実現・未実行)

・無_レ A_{。スル}

▼Aする無_なし。

▽Aすることはない

Aしない。

（動作・行為の存在の客観的否定。本来は動詞だが、「不」に近い副詞とみなす説もある。）

莫^シ A^{スル}

▼Aする莫^シ。

▽何もAしない・誰もAしない

Aしない。

（本来は無指の代詞だが、「不」に近い副詞とみなされる説もある。）

8. 否定副詞（禁止）

次に禁止を表す副詞を紹介しよう。

禁止々々というが、それにも色々あつて、たとえば「笑うな！」と言えば禁止だけど、「笑つてはいけない」と言えば教戒になるし、「笑わないでくれ」といえば否定の命令願望になる。

ニュアンスは文脈から判断するしかないから、柔軟に訳せるようにしたいな。

ところで、禁止を表す副詞というが、要するに否定を表す副詞だ。

「莫」や「無」はもともと「隠れて見えない」という意味を表す字なんだが、そこから無指代詞や否定を表す動詞の働きが生まれたんだと思うけど、それを相手に要求すれば禁止になるよな。

あるいは否定や禁止を表す音が、これらの字を借りて表現されたという説もある。

「勿」や「毋」なんかも否定を表すけど、禁止にもよく使われる。

あまり知られてないが、「不」も禁止を表せるんだぜ。

使われ方が副詞的だから、副詞に分類するんだよ。

酔^{ヒテ}臥^{ストモ}沙^ニ場^ニ君^ニ莫^{カレ}笑^{フト}。

▼酔^{ヒテ}ひて沙^ニ場^ニに臥^フすとも君^{キミ}笑^{ワラ}ふこと莫^ナかれ。

▽（私が）酔^{ヒテ}つて砂漠^{さちやう}に寝^ふ転^{ころも}がつたとしても君^{きみ}は笑^{わら}つてはいけない。

「莫」は無指の代詞として働く以外に、副詞として「**くするな・くしてはいけない・くしないでくれ**」という**禁止も表す**んだ。

つまり見かけ上は、単純な否定なんだが禁止なんだかわかりにくいんだが、文脈から適宜判断するんだ。

ただ、禁止って、「おまえ○○するなよ」とか「あんた○○しないでよ」みたいに、禁止を求める相手が2人称のことが多いじゃないか。

だから、右の例みたいに「君」とか「汝」のような2人称代詞が前に置かれることが多い。
これが見分けるポイントにもなるんだな。
覚えとけ！

それと、通常「なし」と訓読する「無」「莫」「母」「勿」は、禁止を表す時は、「(ゝスル) なカレ」または「(ゝスルコト) なカレ」と読む。

これは日本語の形容詞「なし」の命令形で読んでもいいわけ。

「なし」の命令形だからって、「ないようにしろ」とか訳す必要はないんだぜ。

先生 母言矣。

▼先生言ふこと母かれ。

▽先生おっしゃらないでください。

「母」も禁止を表す副詞だ。

もちろん普通の否定にも用いられるけど、どちらかというと禁止で用いられる方が多いかな。

「母」に似てるけど、全く違う漢字なんだぜ。

「なカレ」と読んで禁止や否定の命令願望を表す否定副詞には、ほかに「勿・亡」なんかがある。
もちろん普通の否定でも用いられる。

そうそう、その「もちろん」は「勿論」って書くけど、「論ずる勿く」、つまり「論ずるまでもなく」って意味なんだよ。

禁止の副詞の最後は「不」。

禁止というと、すぐ「なカレ」だと思いがちだが、「不」も、例は少ないものの禁止を表すことがあるんだ。

例が少ないというのは、そもそも「不」は表現者の「くしない」という意志がこもる語だから、相手に対して禁止する時にはあまり使われないからなんだろうね。

ところで「不」が禁止を表す時は、「なカレ」とは読まない。

ふだん日本語の打消の助動詞「ず」で読んでも漢字だから、禁止の時には「ざレ」と読むんだ。

我且往見夷子不来。

▼吾且に往き見んとす、夷子来たらざれ。

▽私が会いに行くつもりだから、夷子は来ないでくれ。

右の場合なら「来た^レらざ^レれ」と読んで、「来たることな^レかれ」とは読まない。
「母^レ来^レ」だったら「来たること母^レかれ」と読む。
要するに、これは日本語の問題に過ぎないんだよ。

◎ポイント！…否定副詞は禁止の意味も表す。

・莫^{カレスルコト} A^{。セ}。

▼Aすること莫^なかれ。

▽Aするな。・Aしてはいけない・Aしないでくれ。

↓「Aする莫^{カレスル}かれ」と「こと」を省いて読むこともある。

↓「無^{カレスル} A」「母^{カレスル} A」「勿^{カレスル} A」「も同じ。

・不^レ A^{。セ}。

▼Aせざ^レれ。

▽Aするな。・Aしてはいけない・Aしないでくれ。

9. 反語副詞

副詞の最後は反語の語気を表す副詞だ。

「なんで私がそんなこと言わなきゃなんないのよ！」ってのは、要するに「私がそんなこと言うわけない！」ってことだよな。

この「なんで」ってのは、「どういう理由で」ともとれないことはないけど、むしろ理由を問うというより、最初から「どうだろう？そんなことしないよ！」という**反語の語気**を示してるんだな。

こういうのを反語の語気副詞っていう。

「豈^あ・安^い・焉^ん・何^{なん}・独^{ひと}」なんかが代表格だ。

ちなみに「なぜ・どうして・どういう理由で」という疑問を表す語、たとえば「何^{ナニ}」なんかは、中国では疑問副詞とは取り扱わずに疑問代詞とされることが多い。

このあたりは我々には理解しにくいところなんだが、最近は疑問副詞とする学者もあって、君らにはその方がわかりやすいかな。

吾^レ 豈^{シヤムヤ} 惜^レ 死^シ。

▼吾^{われ}豈^あに死^しを惜^をしまんや。

▽私はどうして死ぬことを惜しんだりしようか。(いや、惜しみはしない。)

この例は、「豈^二」が反語の語気副詞。

「豈^二」は、「どうであらう?」と疑いをもちかけてみる語気を表すんだ。

だから、「吾^二豈^二惜^二死^二」は、ほんとに「私は、どうであらう、死を惜しんだりする?」、そんなわけないだろう?と表現してるんだよ。

だから、日本語では「どうして死ぬことを惜しんだりしようか」と訳しているけど、本来は別に訳に絶対に「どうして」をつけないきやならないわけじゃないんだ。

まあ、つけとかないと減点する先生あるかもしれんけどな。

まあ、わからんちんを相手にするときは、そこんところうまくやってくれ。

◎ポイント!...反語副詞は、反語の語気を表す。

・豈^二A^二。^{センヤ}

▼豈^あにAせんや。

▽どうしてAしようか。(いや、Aしない。)

↓文末に反語の語気副詞「哉」などが置かれることが多い。

↓「安^{あん}A」「焉^{やん}A」「何^{なん}A」なども同じ。

ここまで代表的な副詞をいくつか紹介したけど、実は副詞の数はめちゃくちゃ多くって、また、働きも実にさまざまなんだ。

他にも「蓋^{けだし}」(おそらく)や「或^{あるバ}」(おそらく)のように推定を表したり、「必^{かならず}」(かならず・きっと)などのように確定を表すものなどがあるし、また、1つの副詞がさまざまな意味や働きをもって、1つの種類には分類しきれないものなんかもある。

これをマスターするのはなかなか大変で、まさに「副詞を極めるものは漢文を制す」といってもいいぐらいだな。

だから、いつぺんに覚えようとせずに、少しずつ、そう会ったたびにどんな意味かな?って考え、一つひとつ辞書を引いて調べたり、そのつど覚えたりして身につけていくのがいいんじゃないかな。

要は「副詞は述語の前に置かれて述語を連用修飾する語」という基本的な理解をまず徹底することさ。

確かに意味も働きもさまざまだけど、この副詞の多様な意味と働きのおかげで、漢文の表現は実に豊かになっているともいえる。

学校で習う漢文では、この副詞がないがしろにされてるところがあって、否定だとか反語だとかは重視し

ても、あとは訓読して読み飛ばしたりしがちなんだな、実は。

一字の漢字も読み飛ばさない、すべての漢字に意味や働きがあって、それを追いかけていく、それが君らの目の前にいるためぐち先生の漢文授業だってことをお忘れなく！

10・述語の前に置かれる前置詞句も副詞のようなもの

さてさて、「述語の前に置かれて述語を連用修飾する語」が副詞なら、「述語の前に置かれて述語を連用修飾する前置詞句」も副詞みたいなんもんだってわかるかな？
語が句にかわるだけだろ？

〈^テ以^レ杖^ヲ〉叩^ク其^ノ脛^ヲ。

▼杖^{つゑ}を以^{もつ}て其^その脛^{はぎ}を叩^{たた}く。

▽杖でそのすねをたたく。

これは前置詞句の講義の時に出した例文だぜ。
これをこんなふう書き換えてみようか。

常^ニ叩^ク其^ノ脛^ヲ。

▼常^{つね}に其^その脛^{はぎ}を叩^{たた}く。

▽いつもそのすねをたたく。

一目瞭然、前置詞句「以^テ杖^ヲ」と副詞「常^ニ」が等しい関係だってわかるだろう？
どちらも述語「叩^ク」を連用修飾してるじゃないか。

元^ニ帝^ヲ於^テ荊^ニ州^ニ叩^ク即^ニ位^ヲ。

▼元^{げん}帝^{てい}荊^{けい}州^{しゅう}に於^{おい}て位^{くらゐ}に叩^{たた}く。

▽元帝は荊州で即位した。

この例も書き換えてみよう。

元^ニ帝^ヲ將^シ即^ニ位^ヲ。

▼元帝^{げんてい}將^{まさ}に位^{くらゐ}に即^つかんとす。

▽元帝は即位しようとした。

前置詞句「於^テ荊州^ニ」が副詞「將^ニ」と同じ位置に置かれて、述語「即^グ」を連用修飾しているのがわかるだろう？

つまり、「以」前置詞句、「於」前置詞句、「自」前置詞句、「為」前置詞句…と、どれも難しそうに見えるかもしれないけど、こと述語の前に置かれる限り、副詞と同様の働きだってことなんだ。

そう考えると、なんだか簡単に見えてくるだろう？

そういうことなんだよ、漢文を構造的に理解するってことは。

◎ポイント！…述語の前に置かれる前置詞句は副詞と同じ。述語を連用修飾する。



今回の講義はここまで。

あと残ってるのは構造助詞と語気詞、そして接続詞だな。

もうひとがんばりだぜ！